

金の虻よろめき出でし牡丹かな

藤田湘子

四国八十八ヶ所第二十九番札所の国分寺は、私にとつて貴重な花の寺である。『土佐日記』を書いた紀貫之の国司館跡の近くにあり、春には桜・牡丹、初夏の紫陽花、秋の萩・紅葉と目を楽しませてくれる。杉苔の美しい庭は、こぢんまりとしていながらゆつたりと歩いて、掃除の行き届いた境内はとても気持がいい。

その寺で牡丹の花を見ていた時、まさに掲句のような場面に出会った。黄色い蕊の中から、花粉を体いっぱいにつけた金色の小さな虻が、よろめきながら溺れるように這い出してきた。大輪の花は泰然としている。色とりどりの牡丹に出入りする虻の多いこと。なかには、やつとの思いで蕊の深みから這い出すものもいるようだ。

1999年(二一七作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・野本京